

丸山眞男とドイツの思想・学問

――戦前、戦中、そして戦後――

ヴォルフガング・ザイフェルト

はじめに

丸山眞男は思想史家および政治学者として、多くの側面を統合している人物であった。^①青年時代に彼は、政治学の一専門分野である政治思想史では過去と現代、そして西欧と東アジアのそれぞれの政治思想家の作品を読んで、理解し、習得してきた。思想史の方法を展開するために、認識論および知識社会学の著書を詳しく勉強してきた。それから政治学者として、日本の近現代に成立した国家構造の発展を、また国際関係における日本の位置も分析した。そのほかに、外国に起きた様々な政治的な現象に関しても叙述した。そして、諸問題を研究することに日本の資料だけではなく、いわゆる先進国で刊行された研究成果も文献として利用して、自分の研究のために活用した。なお、戦後日本の言論の世界では、しばしば政治哲学者として発言した。これは公共知識人 (public intellectual) の役割である。つねに、社会のな

かに生きている学者の責任というテーマに関して、そして一人の市民として政治的に行動し、そのときにどのような条件に直面しているか、というテーマに関しても根本的な問題提起をした。社会の近代化にもなつて生じる政治の諸問題を取り上げたり、歴史の転換期を論じたりすると、丸山の研究関心は何よりも同じ日本人の政治意識と行動に向けられる。言い換えれば、丸山の研究関心は、彼が社会の近代化過程における政治と歴史に関する「一般的問題」を検討する場合にさえ、日本に集中した。日本人の意識と行動、そしてまたそれらを出発点としたテーマである、日本の近代化過程における諸制度の発展が、丸山の関心の中心となったわけである。

さて、丸山の論文によく出てくるドイツを引き合いに出すことは、ドイツ研究を行うことを意味せず、地域研究 (area studies) を進めることでもない。他方において、丸山が日本の社会と歴史に焦点を合わせることは、視野を制約することを意味せず、また日本研究の枠内に

とどまるものではない。彼の作業の場合には、むしろ逆である。その対比と比較論の方法を使いながら、外国に現れている現象との比較によって、新しいパースペクティブが開かれる。そのために、逆に丸山の書いた日本についての論文を読む外国の読者は、自国に起きた歴史的・政治的な変化に関して、新しい問題提起を展開できることが少なくないのである。

今回の報告では、丸山のドイツの思想家や学者との関係について若干の所見を述べたい。まず指摘したいのは、ドイツの著者を引き合いに出すことが丸山の仕事のすべての領域で見られるということである。それゆえに、全貌を明らかにするのは不可能に近いことだ。そのほかに、日本の丸山研究者は、丸山と特定のドイツの思想家や学者との関係についてよく調べ、丸山が後者の作った概念、議論、テーゼをどのように応用し、更にいかにして発展させたかを浮き彫りにしてきた。^②したがってここでは、幾つかの例に限って論じたい。

丸山はすでに（旧制）中学・高校生のとき、ドイツの文学または哲学の作品を読み始めた経験に、しばしば触れている。^③そして、この関心が持続している。その背景にはどのような事情があっただろうか。もちろん、一九二〇年代後半、一九三〇年代前半の時局と時代の情勢もあり、当時の学制による入学の条件もそれぞれあったが、しかし決定的なのは、若き丸山の知的な関心であったのではないか。このよう

な要因によって、その作品への理解度、そしてその内容との対決がどれほど深かったか、などが決定づけられた。

高校生、ついで大学生になった丸山がどの作品を読んだかを調べると、他の西洋諸国の文学作品の読書と比べて、やはりドイツのものがより多いことが明らかである。確かに様々な動機もあったと思うが、高校のドイツ語の教師が刺激を与えたことを忘れてはいけない。いずれにしても、丸山にはドイツの思想家または学者の思想に対して、特別の親近感があったといえるだろうか。

周知のように、丸山はドイツ史家への道に進まなかった。自分の専門である政治思想史を営むと、まず日本における様々な政治思想がどう展開してきたか、そして歴史に上がってくるその思想の諸命題を現代の「立場」から考えることが中心となっている。但し、これらの諸テーマはどの社会でもその発展にともなって議題に盛り込まれるようになる、と理解していた。したがって、外国の政治思想家もかならずこのようなテーマに従事する。その結果として、外国の思想家や政治学者も間接的にある特定のテーマの問題史を説明することに寄与できるし、また逆に彼らの論文が日本の学者によっても利用されうる。このようなテーマの例としては、「国家理性」または「国家」があげられる。

さて、丸山眞男が生きた歳月を見ると、四つの期間に区分でき

るであろう。戦前（①ここで彼は高校生となり、②助手の時代まで）、戦中（一九三七年から一九四五年まで）、そして戦後を一九五〇年代後半までと一九六〇年から一九九〇年までの期間との二つに分ける。各期間で彼は、一定の研究分野に集中的に論文を作成し、執筆する。但し、同じ期間に二つまたは三つのテーマに関して研究を進めて、時々同じ期間に様々な領域にまたがった研究成果を出版したことは注目に値する。⁽⁴⁾ 初期の期間には研究の重点は、本人の研究関心あるいは資格取得の条件によって決められたと思われる。

I 戦前

（1）高校時代から助手になるまでの期間（一九三一—一九三四）

——文学、認識論、歴史哲学

丸山のドイツの思想や学問との関係はすでにこの若い年齢から始まっていた。高校生の時代に新カント派のヴァインデルバント及びリッケルトの論文を読み、そこでの議論を通じて俗流マルクス主義が抱えている社会的な「反映論」への懐疑的な態度が強められた。しかしながら、それによって丸山が新カント派の信奉者になったわけではない。同じ頃、日本のマルクス経済学の方法に基づく日本の経済史を研究してきた学者たちの分析にも関心を持ちはじめた。日本経済の発展を解明するのにマルクス主義的なアプローチを使った学者が大きな役割を果たしたことを考慮すれば、大学生になったばかりの丸山が一九

三四年に『日本資本主義発達史講座』の論文集を勉強したことは不思議ではなからう。⁽⁵⁾ そのほかに、彼は青年時代から、当時の日本の政治的・思想的な潮流を知って、それに直面したとき、自分が「政治化の時代」に生きている者であると感じた。⁽⁶⁾

その当時に始まった丸山の学問的な関心事は主として次の二つである。一つは、時のたつうちに、一定の政治思想（political idea）の中身がどういうふうに変わってくるかという問題、もう一つは、それぞれの政治思想とその「社会的基礎」（担い手としての社会層）との関係である。これは知識社会学の問題群に入る。それとは別にして、西欧諸国で政治がどう動いているかをフォローしている丸山の政治思想の展開にとって、ワイマール共和国のドイツで行われた国家法・政治論争が特に興味深く、その代表的なテキストの読書が重要なウェイトを占めていた。

丸山は高校入学後、どんな著者の作品、論文を読んだであろうか。幾人かの著者の名前を挙げる前に、その当時の高校、大学の教育システムを説明しなければならぬ。丸山自身の言葉を借りれば、次のようなものだった。つまり、「旧制高等学校の文科というのは、語学の勉強に圧倒的に時間を費やすところで……そうして、原典を読む場合に、比較的対象についての専門知識なしに、いいかえれば文字通り「語学」の勉強に、エネルギーを集中できる領域といえ、文学作品かまた

は哲学です。」⁽⁷⁾ 这样一种制度的な背景があり、一九三三年に旧制一高でのドイツ語教師ベツォルト夫婦との交際もあって、最初にドイツ文学専攻を志望した。その上、上智大学の教師であるベツォルト教授にドイツ語会話を学んだ。

(2) 政治学の学生として(一九三四—一九三七)——政治理論・哲学と思想史の方法

丸山は一九三四年から、日本とイギリスの学者たち(ラスキ、コール、バーカー)の著書ないし論文以外では、ドイツの国法学者であるカール・シュミットの『政治的なものの概念』とハンス・ケルゼンの『純粹法学』を読む。次いで、ワイマール共和国の時代に社会民主主義の理論家でもあったヘルマン・ヘラーと法制史家ギールケの研究書も読む。様々な授業のうち、丸山が大きな影響を受けた南原繁教授の演習では、哲学者ヘーゲルの『歴史哲学序説』が取り上げられた。法学または政治学、そして社会学の研究書をドイツ語の原典によって読む。それらの読書によって得た知識は、一九三六年に大学の『緑会雑誌』に提出した『政治学における国家の概念』に反映された。

同年、マックス・ウェーバーの『政治論集』、経済学者ルドルフ・ヒルファァーディング、政治理論家にして革命家ローザ・ルクセンブルク、法哲学者グスタフ・ラートブルフの著書も読む。翌年マルクスの『ヘーゲル法哲学批判序説』と『ドイツ・イデオロギー』、ヘーゲルの『精神

の現象学』、そのほかにマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、そしてフランツ・ボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像へ』も読む。

丸山の読書に関連して指摘したいのは、彼がどんな学術の書物でも単に「読む」ことにとどまるのではなく、内容に含まれている議論またはそのテキストのテーゼと対決した、ということである。たとえば、カール・シュミットの『現代議会主義の精神的地位』の読書を見てみよう。丸山が使っていた本には書き込みやアンダーラインをひいた箇所が沢山ある。その上、テキストの終わりには、書き付けられた言葉がある。これは丸山がドイツ語で書いた短いコメントで、その意味は、「非常に洞察力ある分析だから、シュミットの主張に対して根拠ある議論を提出することが実に困難だ。」⁽⁸⁾ というものである。

一九六三年に自身をふりかえった丸山は、自己の学問の形成に関してドイツの三人の学者から受けた影響に触れて、こう述べた。「社会的・政治的研究の領域においては、ドイツの「歴史主義」とイギリスの「経験論」との間の中間的立場をとる思想家たち——マックス・ウェーバー、ヘルマン・ヘラー、およびカール・マンハイムのようなひとびと——に、私はこれまでつねに深い共感を覚えてきたし、またもつとも刺激をうけてきたのである。」⁽⁹⁾ これは『現代政治の思想と行動』の英語版への著者序文のなかの文である。この文によって丸山がドイツの

思想・学問に対して、特別な親近感をもったと解釈して良いかもしれないが、私の見方はこのような理解から多少離れている。つまり、この文に現れている三人の学者は皆確かにドイツ人であるけれども、丸山にとって重要なのは彼らの国籍ではなく、むしろ方法論に関する一人ひとりの考察である。

それから、丸山はしばしばマックス・ウェーバーの学問を評価した。一九七八年の「回想」ではこう述べた。「もちろんウェーバーは……『ヒント』とか『触発』とかでは到底表現できないほど、学恩を負っている学者です。……ところが、思想史の方法論という主題をいざ前面に立てて、過去をふりかえって見ますと、われながら意外に思うほど、これこそウェーバーから学んだ、という焦点がクリアに浮び上って来ません。」「同じことをウェーバーの『政治論集』の受容についても述べている。この論文集は丸山にとって議會制、政党と官僚制、リーダーシップ、支配の正統性などの問題を理解するために不可欠の本であったが、思想史についての著作ではない。丸山は日本の統治構造を研究したときに、ウェーバーが創作した概念を使用した⁹が、ほかに実証研究に基づく分析では、自分自身が作った概念とカテゴリーも使った。しかし、ウェーバーの概念は「実質的な統治構造や政治的指導の理論と歴史にかかわる問題で、直接的に思想史とはかわりません。」「¹⁰

ところで、丸山は、すでに助手になる前に思想史と社会史との関係

をめぐる諸問題に気づいた。政治思想史の方法が課題になったときには、マンハイムの知識社会学から得た認識に依拠しながら、自分自身の方法的なアプローチを展開することができた。加えて、マルクスの諸作品を読んだ上で、社会史を考慮に入れないままでの思想的なアプローチは、丸山にはもう考えられないことであった。

Ⅱ 戦時中（一九三七年から一九四五年にかけて）

職業としての学問、助手と助教授——見つけた方法論を前近代日本の思想史へ応用する

「職業としての学問」（マックス・ウェーバー）への道を決めたときに、丸山は方向を西洋政治思想史に向けようとしたが、南原繁教授の助言の結果として、日本の伝統思想および中国の古典の研究に従事するようになった。一九四〇年に助教授になり、徳川時代の思想、なかならず朱子学と国学に専念した。そこで丸山は徳川時代の思想史を「近代的意識」の成立過程を研究しながら、その枠のなかで理解し、解釈することが適切であると主張した。主として、社会秩序の理念である「自然」から「作為」への移行というテーゼを証明するのに、マンハイムが展開した方法を利用する。その方法論の中心的なものはいわゆる「遠近法主義」である。この点について丸山はこう述べた。つまり、

「それにもまして、私に目からウロコが落ちる思いをさせたのは、

彼の理論における遠近法的な見方です。「ペルスベクティヴィスムス」[Perspektivismus]という認識方法の裡に、私は新カント派とマルクス主義とが（方向は正反対ですが）共有しているような対象と認識との一対一の対応関係をつきくずし、精神史を社会史の文脈の中におきながら同時に、精神史特有の発展形態を明らかにする鍵を見出したように思いました。……ですから、過去の思想は後続する思想によって「のりこえ」られたり（こういう発想自体が単線上の継起を予想しています）、吸収され尽すのではなくて、逆に「のりこえ」られた筈の思想が、歴史的变化とともに再評価されたり、「何々にかえれ」というような「復古」運動が精神史上にしばしば起るわけです」¹²

それでは、この「ペルスベクティヴィスムス」というのは一体どのようなものであるのか。丸山はマンハイムを次のように解釈している。「思惟主体（「考えている主体」）の社会的立地が思惟内容に構成的に浸透する、ということが、ここにもあてはまるわけです。整序された普遍妥当的な認識か、それともカオスかという二者択一のかわりに、いまやブルーラルで、しかも動的な展望が現れます」¹³丸山自身が指摘したように、この知識社会学的な洞察は、彼が少し後に書いた研究論文に、直接ではなく、間接に反映されるようになった。

Ⅲ 戦後（一九四六年から一九五〇年代後半まで）

現代史、明治時代の思想史、政治哲学の論文

日本の戦時体制が崩壊し、アメリカ軍の占領下に新しい制度が「輸入」された。丸山は民主主義をいかにして国民の思想と行動に根づかせるか、を考えている。大学以外の啓蒙的活動も含めて、様々な知識人グループに参加しながら、政治学・現代史の分野にエッセー、論文などを投稿している時代だ。一般論としての民主主義と大衆社会、憲法第九条、「国際政治における日本」のようなテーマも取り上げる¹⁴。さて、日本の近現代に成立した政治体制とそのイデオロギー、特に「日本ファシズム」をめぐる諸論文を、丸山とドイツの学問との関わりという観点から見よう。

「超国家主義の論理と心理」。このエッセーをもって丸山は、連合国の首脳が多かれ少なかれ、敗北した日本の政治体制を単純にナチ・ドイツおよびファシズムのイタリアの政治体制と同一視する見解に、反駁したと思う。アメリカ政府が使った言葉である「超国家主義」は、ドイツの「国民社会主義」およびイタリアの「ファシズム」との対比では、類似点よりも相違点の方が注目値する。これはこの三国それぞれの運動にも、政治体制にも、イデオロギーにも当てはまる。いずれにしても、丸山はこの論説（または一連の日本ファシズム分析の諸

論文）によってファシズムの比較研究への「手がかりを提供した」のである。⁽¹⁵⁾

終戦後の一〇年間、丸山は戦争中にアカデミックな『国家学芸雑誌』に掲載された徳川時代の思想史をめぐる三つの論文を一冊の著書に纏めたが、同時に日本現代史の研究をしてきた。彼は、日本が特に東アジアにおいて起こしてきた紛争を武力で解決しようとしたのは何故か、また国内政治では、政治体制において政党および利益集団の役割をやめさせたのは何故かを説明し、その原因を探究した。雑誌『世界』の一九四六年五月号に「超国家主義の論理と心理」を掲載した。この論説で丸山は、ドイツの国法学者カール・シュミット（一八八八—一九八四）が指摘した西ヨーロッパの近世・近代国家における「国家の、宗教・思想が含む真、善、美の価値に対する中立性」という特徴づけ（「中性国家」）を、日本の近代国家の形成過程と対比させ、日本では最高の価値が最終的に天皇に体现された、と結論した。一九三八年に発表されたシュミットの「トマス・ホッブズの国家論におけるリバイアサン」を丸山は参考にし、日本のケースを明らかにするためにシュミットの論考を使用した。その場合、たとえば君主制の性格を考えると、日本の天皇を、西ヨーロッパの近世に出現してきた絶対君主制の君主と同一視することは無理である。丸山の分析から得られるもう一つの結論は、一九三〇年代と一九四〇年代半ばまでの日本の政治体制には、同じ頃のドイツやイタリアで最高の権力を握った独裁者である

ヒットラーやムッソリーニのような人が出て来なかった、ということである。日本の「軍部ファシズム」の時代には、未曾有の権限をもっていた東条英機さえ「独裁者」的な首相ではなかった。⁽¹⁶⁾ここでも丸山はシュミットの独裁と独裁者の定義を念頭におきながら、分析を進めてきた。

丸山は、当時の日本の権力の構造を分析したとき、シュミットのほかに、イギリス、米国などの幾人かの西洋の学者の研究書も参考にするが、ドイツ人、そして英米に亡命したドイツ人の研究にかなり学んだ。その理由は、亡命したドイツの学者たちはドイツの社会、政治、思想をいわば「中から」よく知っていたからであろう。

それから、丸山眞男は、ヨーロッパ諸国のファシズムと対比しながら、数冊の研究書を参考にし、みづから「日本ファシズム」を分析した。言うまでもなく、当時、ドイツの研究者、またはドイツからアメリカへ、あるいは他の外国へ亡命したドイツの研究者による著書だけでなく、他の外国の学者の労作も読んだが、外国へ亡命したドイツの学者が出版した著作には特徴があった。それは一九二〇年代、一九三〇年代におけるドイツの政治的・社会的な時勢についてのいわば「中から得た経験と知見」があるということだ。そうした知識に基づいている研究書は非常に明解であるということで、説得力のあるものとして受け入れられた。なによりもワイマール共和国が崩壊してしまう間

に、ファシズム運動が強まったりして、その勢力が台頭したりする過程を観察しながら、分析を行っていた。丸山は「日本ファシズムの思想と運動」(一九四八)、「軍国支配者の精神形態」(一九四九)、「ファシズムの諸問題」(一九五二)を執筆したとき、そうした著作群の成果を一緒に利用したようである。そのなかの一つはドイツ人で、アメリカへ亡命したフランツ・ノイマンの『ビヒモス』という労作である。このナチ・ドイツに関する「最初の構造分析」(C. Wright Mills)を、丸山は高く評価したようである。この著作の原文は英語で、一九四二年にイギリスで出版され、一九四四年に増補版としてアメリカで出版された。ちなみに、日本語版の『ビヒモス——ナチズムの構造と実際』は一九六三年に発行され、ドイツ語版が一九七七年に、遅れて出版された(文庫版はさらに遅れた一九八四年に出版された)。丸山はこの本をいつごろ入手したであろうか。詳しいことはまだ明らかではないが、いずれにせよ、一九四四年の第二版を一九四七年に読んだことは事実である。⁽¹⁷⁾この事実を考慮に入れると、丸山は一九四七年、「日本ファシズムの思想と運動」の公開講演を行った時点で、すでに『ビヒモス』の研究成果および結論を知っていたと思われる。「日本ファシズム」を説明するために、丸山がノイマンのこの著書のなかでに現れている分析装置を応用したかどうかは、まだ証明できないところである。ノイマンのナチズムの社会・経済・政治構造についてのテーゼは「全体主義的多元主義のカオス」というものである。⁽¹⁸⁾ちなみにこのフランツ・ノイマンは、ずっと後で有名になったフランクフルト学派の

人たちと多少関係があったことは周知の通りである。戦後西ドイツの政治学の創始者の一人でもある。

そして、丸山は「ファシズムの諸問題」の論文を執筆したとき、次のように注記している。「この点(ナチ党と独占資本との融合)とくに、F. Neumann, op. cit., p. 504, n. 63および p. 611-614参照。なお本書全体を通じてフランツ・ノイマンの分析は、ナチス社会をもつて、階級を解消したマスの支配とみるE・レーダーや、もはや資本主義の法則の妥当しない一種の国防経済体制(Wehrwirtschaft)と見るP・ドラッカーの見解に対する最も見事な反証である」⁽¹⁹⁾。なお、丸山は、政治理論への重要な寄与である「政治権力の諸問題」(一九五七)のなかで、ノイマンが一九五〇年に発表した論文“Approaches to the Study of Political Power”をあげている。そこでノイマンはシュミットが主張する主権をめぐる有名な命題——つまり、国家が例外状態(戦争、革命、独裁)に陥ると、主権がどちら側に置かれているのか、がはじめて明らかになる——を肯定的にみた、と丸山は指摘する。⁽²⁰⁾ノイマンの著書以外に、アメリカもしくはイギリスへ亡命したドイツの学者の著書のうちに、社会学者 Emil Lederer の『The State of the Masses』(一九四〇、原文は英語)および政治学者 Sigmund Neumann の『The Permanent Revolution』(一九四二、原文は英語)もある。丸山はこれらを一九五七年に発表された論文「ナショナリズム・軍国主義・ファシズム」を執筆したとき、参考にしたが、おそらくこの二冊も終戦以

前、日本で入手できなかった著書であったであろう。

ところで、この年代に丸山は、ほかにも明治時代の政治思想をめぐっていくつかの論文を発表した。残念ながら、それらをここで対象にすることは出来ない。ドイツの思想家との関わりという観点からみると、また別の注目すべき一節がある。一九四七年に発表された論文「科学としての政治学」のなかでの社会に対する学者の立場についての見解であるが、丸山はウェーバーの見方をマリアンネ・ウェーバーの言葉を借りて、こう紹介する。「ウェーバー自身は、理論的な価値関係づけと、実践的価値判断との分離は一つの『研究者の理想』で、それを完全に実現することはむしろ人格の統一性と矛盾すると考えていたのである……世界観的価値判断に対する傍観的態度、乃至は左右両翼に対する『中間派』の立場と混同されるのを鋭く斥け、むしろ学者が各自の世界観乃至政治的立場をハッキリ表明することを市民としての義務として要請している」²¹。この見方は正しい、と丸山は認めているが、ウェーバーの言葉を誤解しながら、学者としての傍観者という像もまた現代日本の社会でどのような機能を果たしているか、明らかにしている。

IV 戦後の後期（一九六〇年から一九九〇年代にかけて）

さて、先にあげた時代区分のなかの最後の期間に関して、つまり一九六〇年以降、ドイツの学問・思想への言及があったかどうか見てみ

たい。私が知っている限り、そういった言及は明らかにほとんどない。ほとんどないというのは何故であろうか。答えは簡単に出てこないが、おそらく次のように言えるのではないか。

一つの理由は、丸山がイギリスとアメリカの一流の大学に招待され、そこで英語圏における最新の日本研究の成果だけでなく、社会学理論も含めた最新の社会学の文献を直接に知ることができたことである。特にロバート・ベラー氏との交流が大きな役割を果たしたようである。もう一つは、一九五〇年代に分断された国ドイツは、東ドイツであれ西ドイツであれ、思想的にも政治的にも面白みに欠ける時代に入ったことである。いわゆるフランクフルト学派の思想家 Theodor Adorno と Max Horkheimer、そして次世代の Jürgen Habermas らによるそれぞれの思想と社会科学的分析の影響は一九六〇年代後半以降になつて、はじめて目立つようになった。それと同時に、西ドイツで起きた社会の変化がゆっくり、少しずつ目に見えるようになるし、激変の時代というわけではなかった。そうした事情を背景にして、外国の思想家および学者の間では、当時の西ドイツの政治、社会、思想を知りたいという動機につながるきっかけがあまり生まれなかったように思われる。そして、三つ目の理由として、丸山眞男が一九六〇年代、一九七〇年代は主として自国の現代社会とその思想的伝統との関連を再び研究するようになり、これに集中する時代であったことが挙げられる。しかしながら、世界の歴史および世界の思想に関して驚異的な

知識を有した学者としての丸山は、いわゆる「日本回帰」と全く異なった形で日本の思想史を研究しつづけた。

一九五〇年代後半に丸山は再び日本の思想史に向けて、優先的に歴史意識の古層を取り上げるようになった。「コトバの「翻訳」の問題をふくむ文化接触と文化変容という観点の思想史への導入」⁽²²⁾という見方が前面に出てくる。一九六三年から現在に至るまでの歴史哲学的な基本過程を熟考し、今度はマックス・ウェーバーの宗教社会学のテキストを本格的に読むようになる。「原型」、次に「古層」、その後「執拗低音」と規定している歴史意識のなかの層を浮き彫りにしていた。方法論でも、内容の面でも新しい考え方を展開する。そうすると、ドイツの研究者よりもイギリスとアメリカの学者が刺激を与えたとみえる。また歴史をめぐる構想にも変化が起きている。つまり、丸山の歴史の思想には「単数の近代化」から「複数の近代化」への移行が明らかになる。ウェーバーのテーゼへのはつきりとした批判を表明しないまま、諸社会の多様性に応じて複数の近代化 (multiple modernities) ⁽²³⁾がある、と主張する。しかしながら、近代化の多様性を展望するにもかかわらず、ポストモダンの一部の思想家たちと違って、普遍性の理念を完全否定することはしない。この点では、ウェーバーには説得力のある答えが見えてこないと思われる。⁽²⁴⁾この丸山の思想的な展開はそれ以前から準備されていたようだ。すでに「忠誠と反逆」(一九六〇)には、社会はその歴史において「単線的な進歩の道」を行かないという

考えが入っている。⁽²⁵⁾

おわりに

なお、丸山の思想的な研究に対する批判的な見解の一つとして、彼はその研究を進めるに当たって、主としてヨーロッパ思想の翻訳者であつたということが挙げられる。これは丸山が日本ナショナリズムを歴史的な文脈から切断するだけではなく、ヨーロッパ諸国のナショナリズムもその歴史的な文脈から切断することに由来する、という見方がある。⁽²⁶⁾確かに、丸山は近代への過渡期の思想家たち(荻生徂徠、後に福沢諭吉など)を詳細に研究したが、いわゆる「ナショナリスティック」な思想家(北一輝、大川周明など)をめぐることは、戦後の論文ではそれほど詳細な叙述を残してはいない。これは丸山が後者のグループに属している者の日本への影響を高く評価しなかったからであろう。ただし、忘れてはならないのは、様々な思潮(例えば、アジア主義)をまだ調べていないことを彼ははつきりと欠点だと見ていたことである。そして、丸山の「日本ファシズム」を解明するために努力したその動機は、彼らの思想、そしてより実践的にみて、大学で「超国家主義」を主張している教員の見解を厳しく批判することにあつた。特に一九四〇年代の国家官僚制と軍部がもっていたイデオロギー(たとえば、『国体の本義』に現れているイデオロギー)を支持する著作を丹念に調べなかった。そのことを別にして、彼らが掲げている「超国

家主義」と「日本ナショナリズム」とを等しいものと捉えて、同一視すると、理解の隔たりがあるのではないか。丸山は、ヨーロッパ、またはドイツの思想と学問の一部を応用することによって、日本の思想史を解明することに独創性をもつ分析を展開したと思われる。

そして、別の観点からみると、丸山の日本の社会に果たした役割、また彼の思想が有した機能は、ある意味ではドイツにおけるフランクフルト学派の思想が有した機能と比較することができであろう。彼が考えた民主主義の構想も、戦後ドイツの民主主義の思想と直接的には関係していないが、幾つかの面では類似点がある、と筆者には思われる。丸山の思想のなかにある予見的なものとしては、政治家が新技術を巧みに採用して個人の意見形成および世論への manipulative Power を行使することができる、というものが挙げられる。この政治の問題について、丸山はすでに一九五〇年代にいくつかの指摘をした。ドイツであれ、日本であれ、アメリカ合衆国であれ、依然として私たちにとって、学びうるアイデアが多く、これらをさらに展開しなければならぬと思われる。

注

- (1) これは恐らく杉田敦氏が「解説」に付けた見出し「丸山眞男という多面体」に示されている。杉田敦編『丸山眞男セレクション』（平凡社ライブラリー、二〇一〇）四四四頁。

- (2) たとえば、丸山眞男とカール・シュミットについて、権左武志氏の「丸山眞男の政治思想とカール・シュミット（上・下）——丸山の西欧近代理解を中心として」『思想』第九〇三号・第九〇四号（一九九九年九月・一〇月）を参照。
- (3) 『思想史の方法を模索して——一つの回想——』（一九七八）『集』⑩三二三—三四七頁。
- (4) 一九四七年に丸山は福沢諭吉について二つの論文を執筆し、そのほかに日本の政治学に関して「科学としての政治学」も発表した。すなわち、時代区分のなかの一つの期間で一つの研究分野だけに従事したとは限らない。
- (5) マルクス主義経済学の古典を勉強した丸山に関しては、荻部直「丸山眞男——リベラリストの肖像」（岩波新書、二〇〇六）六五—七〇頁。
- (6) 権左武志氏によって証明されたように、この表現はシュミットを踏まえて丸山がつくり出した。筆者は丸山の「政治学における国家の概念」の独訳を作ったとき、この言葉について間違った注釈ノートを入れた（ドイツ語版、注6）。この場を借りて一言お断りします。
- (7) 『思想史の方法を模索して』『集』⑩三二八—三二九頁。
- (8) 丸山眞男文庫に所蔵されている丸山の手沢のある『現代議会主義の精神史的地位』（Die geistesgeschichtliche Lage des heutigen Parlamentarismus（登録番号082574））の閲覧を許可してくれた関係者の皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。
- (9) 「現代政治の思想と行動」英語版への著者序文」（一九八二）『集』⑫四八頁。
- (10) 『集』⑩三三六頁。
- (11) 『集』⑩三三六頁。
- (12) 『集』⑩三三三—三三三頁。
- (13) 『集』⑩三三四頁。
- (14) 酒井哲哉「近代日本の国際秩序論」（岩波書店、二〇〇七）第一章「戦後外交論の形成」一九—一八頁、参照。
- (15) 山口定「丸山眞男と歴史の見方」、小林正弥編『丸山眞男論——主体的作為、ファシズム、市民社会』（東京大学出版会、二〇〇三）一二三—一二四頁。

参照。

- (16) 周知のように、日本の歴史学では新しく発掘された資料に基づく、丸山のテーゼに対する批判的な見解が提出された。一例としては、吉田裕『アジア・太平洋戦争 シリーズ日本近現代史6』（岩波新書、二〇〇七）がある（七四―八四頁）。
- (17) 丸山眞男文庫に所蔵されている丸山の手沢のある『ベヘモス』（Behemoth: the structure and practice of national socialism, 1933-1944（登録番号0180330））の閲覧を許可してくださった関係者の皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。
- (18) 日本で丹念に調べられた論文としては、住沢博紀「二〇世紀を生きた批判的政治学者フランク・ノイマン」、日本政治学会編『二〇世紀のドイツ政治理論（年報政治学・二〇〇二年度）』（岩波書店、二〇〇二）一〇五―一三二頁、参照。
- (19) 『集』⑤二七五―二七六頁。
- (20) 『集』⑥三五二頁。
- (21) 「科学としての政治学」『集』③一五二頁。
- (22) 「思想史の方法を模索して」『集』⑩三四三頁。
- (23) 平石直昭氏より、「ウェーバー生誕一〇〇年記念シンポジウム報告草案（抄録）」、東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集』第三卷（岩波書店、二〇一五、三一―五六頁）、また、「普遍の意識欠く日本の思想——丸山眞男氏を囲んで」『集』⑯（四七―六七頁）などの文献を教えていただいた。厚くお礼を申し上げます。
- (24) 野口雅弘氏は最近、「丸山眞男とウェーバー研究——複数の近代 multiple modernities をめぐって」という論文を刊行した。中野敏男ほか編『マックス・ヴェーバー研究の現在——資本主義・民主主義・福祉国家の変容の中で』（創文社、二〇一六）三五三―三六五頁を参照していただきたい。
- (25) 川崎修「解説」、丸山眞男『忠誠と反逆——転形期日本の精神的位相』（ちくま学芸文庫、一九九八）四八五―四九九頁。
- (26) 植村和秀「翻訳者としての丸山眞男——ヨーロッパ思想と日本ナショナリズム」『産大法学』第四〇巻第三・四号（二〇〇七年三月）三三五―三六五、